

## 留学と国際交流

井関祥子

現在、若い世代が国外に目を向けない、留学をしない、との問題が指摘されています。2025年初頭に、日本人全体でのパスポート保有率が約17.5%であることが報道されました。2024年に新たに発行されたパスポートの半分は、30歳未満の若者層によって取得されたものだそうですが、年間の発行数はコロナ禍前の2019年の水準に戻っていないとのこと。また、他国のパスポートの保有率は、韓国で4割、台湾で6割であるとのこと。ここ3年ほどの円安傾向も影響しているとはいえ、若い世代だけではなく国外への興味が全体的に薄れているのかもしれない。

私は大学で国際交流に携わってきました。最近、ある海外の大学と、大学院生および博士課程を修了した、若手研究者を半年から1年ほど派遣し合って研究を進展させてもらいましょうとのことになりました。この期間は、お互い大学として、受け入れる若手研究者から、授業料や大学設備使用料などを徴収せずにする期間として設定しやすいのです。これを同僚の教員に話したところ、若手世代は「タイパ」を考えるので、若手研究者に留学として勧めるにはこの期間が合っているのではないかと、との意見でした。

私は、留学するのであれば、最低でも四季は経験して欲しい（すなわち最低1年）と考えてきたので、この同僚の発言に少し戸惑いました。しかしながら、よくよく考えると、新型コロナウイルスにより、会議や講義のオンライン化が一気に進みました。授業の中で、海外の大学の先生にオンラインでの授業をお願いできるようになりました。外国が身近になったとも言えます。ですので、留学の考え方に変化があっても当然です。

私は、英国オックスフォード大学に約5年間留学しました。研究上も有意義な時間でしたが、英国の文化などを理解することが楽しく、あっという間に時間が経ちました。医学部と歯学部しかない大学を卒業した私には、歴史ある総合大学はとても魅力があり、深く理解はできていないでしょうが、アカデミアはどのようにあるべきか、などを肌で感じたと思っています。これは、現地にそれなりの期間滞在したからこそできたことです。一方で、今はオンラインミーティングでできることも多いですし、生物系ではコンピューターでデータ解析すること

も重要になってきていて、効率的に留学をするのも重要かもしれません。それでも、短期間であっても、現地での対面を通じた経験は貴重なものです。

そして、留学期間が短かろうと長かろうと重要なポイントがあります。オックスフォードは、世界各国から研究者が集まってくる場所ですので、日本人も多くいました。とはいえ、時々、「私と接して、日本人ってこんな感じなのだ」と思われる可能性があると感じました。海外にそれなりの期間滞在すると、意図せず母国代表になっている可能性があります。ですので、海外に研修や留学で行く若手研究者には、日本人代表として認識される可能性を伝えていきます。もう一点、留学している人たちが、草の根で国際交流を担っていることです。国の利益の追求によって、国家間が対立することがしばしばあります。一方、研究者は、国の対立とは関係なく、それぞれの領域に共通する研究結果の認識をもって討議します。その中で、友情が芽生えることも多々あります。異なる文化背景を持ちながら、お互いの価値観を認め、より良い研究を目指して切磋琢磨することになります。これこそ、国際交流を構成する個々の活動です。このような機会は、留学するからこそ得られることが多いです。

留学で色々なことを感じて体験し、将来に活かしませんか。



天皇陛下の令和6年の英国訪問の際のお言葉にもあった、オックスフォード「夢見る尖塔」の一部